

## 2021年4月18日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 17 章 6～11 節

### 説教題：信仰者の慰め

ある子供のメッセージです。先生は、1000 円札を取り出して子供達に聞きました。「これは何ですか」。「1000 円です」「欲しいですか」。「欲しいです」。「では、これをくちやくちやにして、ふんずけて、しわしわになったら、欲しいですか」。「欲しいです」。「どうしてですか」「やっぱり 1000 円だから」。「そうです。神様は、私達をこのように見ていると下さいます。私達がどんなに傷んでも、ボロボロになっても、神様の目には私達は同じ価値なのです。私も時々、信仰がボロボロになっているのを感じることがあります。ですから、その話に慰められたのです。私達には、慰めが必要です。そして聖書は、私達に慰めを語るのです。

イエス様は「告別の説教」の後、長い祈りをされました。それが 17 章の内容です。本日の箇所は、イエス様が弟子達のために祈られた祈りの一部です。なかなかピンと来ない箇所ですが、イギリスの宗教改革者ジョン・ノックスという人は、亡くなる前の日々、付き添いの人にこの箇所を読んでもらって「何という慰めだろう」と言っていたそうです。この聖書箇所も私達に「信仰生活の慰め」を語ってくれる箇所なのです。「4つの慰め」について学びます。

### 1：神が私達を求めておられる

イエス様は 6 節で「わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下された人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らは、あなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました」(6)と祈られました。ここで言われていることは「神ご自身が弟子達を世から取り出してイエスに与えられた」ということです。ということは、弟子だけではない、イエス様に来る者は皆、神が世から取り出してイエスを信じるようにされる(た)ということなのです。イエス様は、このことを他の言い方で「父のみこころによらないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない」(ヨハネ 6:65)と言っておられます。私達が神を信じるということは、私達の方が「神はどこにいるのだ」と神を探して、どうにかして神に出会い、「もう離しませんよ」と必死になってしがみつくと、そういうことではないのです。神が、こんな私達を求めて、私達に近づいて下さり、私達の心に働いて、そして私達がイエス様を信じる事が出来るようにされるのです。

鼻が低いのを悩んで死のうとした人の話を聞いたことがあります。昔の話です。その人は、小学校を卒業するとすぐ、上野の飾り職人の家に奉公に入りました。毎日毎日、銀細工を磨くのが彼の仕事です。磨いている銀細工に自分の顔が映りますが、とにかく鼻が低い。同僚が「お前は良いな、雨が降っても雨が鼻に当たらないだろう、ころんでも鼻をすりむくことはないだろう」と囁き立てますが、返す言葉がありません。そこで彼は、生きている気がなくなって、悩んだ末に死ぬことにしました。死ぬつもりである晩、上野の山の墓地に行き、墓石に腰をおろして「ああ、これで最後か」と悲しんでいました。すると西郷さんの銅像の方向から「ドーン、ドーン」という太鼓の音と、「ただ信じよ…信じる者は皆救われん」という讃美歌の歌声が聞こえてきました。「死ぬ前に一回くらいキリスト教の話聞いてみるのも悪くないだろう」、そう思っ行ってみると救世軍の説教があったのです。説教に聞き入っているうちに、鼻が低いのを恥ずかしくて悩んだ自分が情けなくなって来ました。「恥ずかしいのは、悲しいのは、俺の鼻が低いことじゃないんだ、心が罪に汚れていることだ」と分かったのです。それから彼は、信仰を持って、新しい歩みを始めたのです。

なぜ、彼は上野の山に行ったのでしょうか。なぜ、そこで救世軍の説教が行われたのでしょうか。

なぜ、死ぬ前に説教を聞いて見ようと思ったのでしょうか。なぜ、あんなに悩んでいたのに「鼻が低いことなんか大したことじゃないんだ」と思えたのでしょうか。神様の方が彼に近づいて、彼の心に触れられたのではないのでしょうか。

私達の信仰は、神様が先に動いて始まるのです。神様の方が私達 1 人びとを「私の所に来なさい」と求めておられるのです。神様の方が私達を求めて始まる信仰だから、私達がどんな状態になったとして、神様が最後まで責任を持って下さるのです。これがキリスト者の慰めです。

## 2：私達の神は憐れみの神である

6 節でイエス様は「わたしは…あなたの御名を明らかにしました」と祈られました。「聖書」で「御名」というのは、その人がどういう人であるか、その人の全てを表す言葉として使われます。「あなたの御名を明らかにした」と言われたとき、「私はあなたがどのような方であるか、それを明らかにしました」という意味です。「旧約」の人々は「主の御名をみだりに唱えてはならない」(出エジプト 20:7)という決まりを守って、神の名前を口にしませんでした。しかし、名前を口にしないだけでなく、いつの間にか「神がどのようなお方なのか」分からなくなってしまったのです。

「福音書」に、イエス様のところにツアラートという病気の人がやって来る記事があります。当時の決まりでは、ツアラートにかかった人は、街の中に入ってはいけないことになっていました。宗教家は、そういう人を見つけたら、石を投げて追っ払って「私は汚れた者に触れて身を汚すことはなかった」と自慢したのです。ツアラートの人々にとって、宗教とは何だったのでしょうか。神とはどんな方だったのでしょうか。

しかしその人々も、それでも神様の中に一縷の希望を見ていたと思います。1 人のツアラートの人がイエス様のところにやって来ました。イエス様の噂を聞いていたのでしょうか。そして恐らく彼は、イエス様の中に神的なものを見ていました。彼は、人の中に入れば石を投げつけられて追っ払われるということを知っていました。どれほど悔しい思いをするか知っていました。でも彼は、イエス様を通して「神は自分をどう思っておられるのか、自分をどう取り扱われるのか」、それを知りたかったのです。彼はイエス様の前にひれ伏して言います。「お願いでございますっ！どうぞ私の体を、体をもとどおりにしてください」(ルカ 5:12・リビング・バイブル)。イエス様は、言葉だけで人を癒すことが出来た方です。でもイエス様は、彼に手を延ばして、しっかりさわって、そして癒されたのです。彼にはそれまで神が分からなかった。しかし今、イエス様を通して、神がどのような方であるか分かったのです。神は、彼の心の痛みを知っておられ、その傷に触れて、そこに優しい、しかし力強い御手を延ばして下さる方だったのです。

イエス様は、生涯を通して「神はあなたを愛して、あなたを心配しておられる」というメッセージを語られたのです。そして人々を癒し、罪の赦しを宣言し、苦しみから解放して行かれました。イエス様は、また何度も「私は神のところから来た、私と神とは一つです」と言われました。つまり「私が教える神が本当の神の姿なんだ」と言われたのです。

信仰者の慰め、それは、私達の信じている神は何だか分けの分からない神ではない、私達の信じている神は、イエスが教えて下さった憐れみの神であるということです。神は、私達の心の奥深くにある傷まで知っておられ、私達の労苦を知っておられ、私達を慰め、励まし、支え、導こうとされる方なのです。

以前、水曜集会で「岩渕まこと・由美子コンサート」を鑑賞したことがあります。ご夫妻は、6 歳のお嬢さんを脳腫瘍で天に送られます。由美子さんは「もう少し私が気遣ってあげれば良かったの

に、あの時、ああしてあげれば良かったのに」と自分を責め続けたのです。自分を責めるのは、本当に苦しいことです。しかし、その彼女に、神が語られたのです。「もう自分を責めるのは止めなさい。あなたが自分を責めているあの出来事の中にも、私は介在していました。あなたが全部を1人でやったのではない」。1人の姉妹の霊的な体験ですが、何という慰めの導きでしょうか。だからこそ私達は、その神に信頼し、その神に祈り求めることができるのです。

### 3：神は私達を蔑まれない

イエス様は弟子達についてこう祈られました。「私は彼らによって栄光を受けました」(10)。これは、この時点でも、弟子達がイエス様の影響を受けて、イエス様の素晴らしさの幾分かでも映し出す存在になっていた、ということもあるかも知れませんが、彼らはこの直後、イエス様が逮捕されると逃げて行く人達です。イエス様はそれを知っておられました。それにもかかわらず「私は彼らによって栄光を受けました」とはどういう意味でしょうか。

彼らは、十字架に直面して「どれほど自分達が弱く情けない者であったか」ということを嫌というほど思い知らされ、崩れてしまいます。しかし、その彼らが再び立ち上がって、イエス様のために働くようになるということ、イエス様は知っておられたのです。いや、そのために「彼らを保ってください(守ってください)」(11)と祈られたのです。そして彼らは、神の愛と赦しを本気で受け取って本当に立ち上がって行くのです。イエス様のことを、地中海世界に出て行って、命がけで伝え始めるのです。

「キリスト者の慰め」、それは、私達がどんなに惨めな状況に落ちても、私達が自分の弱さ、足りなさの故に失敗をしたり、また、色々な状況の中で倒れそうになっても、いや実際に倒れるような経験をしたとしても、神は、その私達をもう一度立たせて、歩ませて下さるということです。私達は失敗をします。私も自分を情けなく思うことが多いです。しかし、椎名麟三という作家が「公園の裏」という短編を書いています。生活に打ちひしがれた女性がいます。彼女は今の不安な生活から自分を解放してくれるものは、死だけだと考えています。恋人と池のボートに乗っている時、ボートが転覆して、彼女は池に落ちて、「死ぬんだ」と思うのです。その彼女のところに恋人が歩いてやって来て言うのです。「立てば立てると言っているのに、どうして分からないんだ」。

私達が、絶望せずに、神の赦しと助けを本気で信じて立ち上がろうとすれば、私達も「立てば、立てる」、何回でもやり直すことが出来るのです。イエス様が祈って下さっています。神の助けは、私達の足下にいつもあるのです。神は、私達が失敗しないことを、倒れないことを「私の栄光」とは言われません。失敗した時、倒れた時、神を信頼して立ち上がって行くことを「私の栄光」と言われるのです。

### 4：神の御名が私達を守る

イエス様は11節で「わたしはもう世にいなくなります…聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください(守ってください)」(11)と祈られました。弟子達は、3年間、イエス様と一緒に行動しました。言葉を換えれば、イエス様を通して神様に繋がる事が出来たのです。イエス様を通して神の守りを経験することが出来たのです。しかしイエス様は天に帰られます。彼らは地上に残ります。物理的にはイエス様を通して神様と繋がる事が出来なくなるのです。そこでイエス様は、神御自身が弟子達を守って下さるように祈られます。しかしここで不思議なのは、「神様、あなたが彼らを守って下さい」ではなくて「あなたがわたしに下さっているあ

あなたの御名の中に、彼らを保って(守って)ください」(11)と祈っておられることです。どういうことでしょうか。「御名」というのは、「神がどういう方であるか」という神様の性質を表す、と申し上げました。ということは、この言葉を分かり易く言い換えると「弟子達が、私が示した『神がどういう方であるか』、その神様に信頼して、そして、その信頼に答えて下さる神様の守りを経験することが出来るように」という祈りなのです。

私の友人に、Kさんという人がいます。神学校で私にいつも「ここでまで導いて下さった神様はこれからも導いて下さいますよ」と言って励ましてくれた人です。彼にもう一つの口癖がありました。それは「これはもう神様の御手の中にあることですから」と言う言葉です。彼は、「インドに行ってインドの貧しい子供達に仕えたい」と言う願いを持っていました。ところが、いつも問題が山積みでした。でも彼は、問題にぶつかる度に「これはもう神様の御手の中にあることですから」と言って投げ出さないのです。神の守りと導きを信じ切っているのです。でも、ついに道が開かれて、彼はインドに行きました。1度、彼のニュースレターを受け取りました。そのレターの中に何度も書いてある文字は「守られています、神はこんな者達を守って下さっています」という言葉でした。私は、神に信頼する生き方の強さを教えられる気がします。

信仰は「神が守ってくれたら信頼しよう」ではなくて、「神は私を守られるに違いない」と信頼して行くときに神の業を経験するのだと思います。それを、彼を通して教えられるのです。キリスト者の慰め、それは「神は私達の信頼—(それは小さな信頼かも知れない、しかしその小さな信頼)—を喜ばれ、私達の信頼に応じて下さる神である」ということです。だから、神への信頼こそ、私達が捧げる最大の捧げものではないかと、私は思います。

### 終わりに

『神の民である』ということは『目に見えない神に頼って生きる』という不安定を選ぶことだ」と言った人がいます。しかし、その不安定の中で、私達は信仰の慰めを見出すのです。神の慰めに支えられて、新しい週も新しい歩みを進めて行きましょう。